称号及び氏名	博士（言語文化学）　陳　柯岑
学位授与の日付	2024 年 3 月 31 日
論　　文　　名	村上春樹作品研究――歴史と犠牲
論文審査委員	主　査　　山﨑　正純
	副　査　　西田　正宏
	副　査　　山東　功

論文要旨

本論文は、一九八〇年代以降の現代日本文学を牽引した文学者の一人である村上春樹の小説作品を対象として、村上春樹が同時代の日本社会とそこに生きる人々の姿にどのような歴史的あるいは思想的な意味や価値を見出し、それを小説作品として形象化するためにどのような小説技法や方法論を展開したのかを分析・考察するものである。本論文によって、歴史と対峙する人々の抵抗と犠牲が村上春樹の作品に一貫して描かれており、社会的、政治的な圧力に抗して生きることの意味が問われ続けてきたことが明らかになった。論文は全体で九つの章からなり、主題によって四部構成となっている。まず各部の主題を簡潔にまとめる。

第一部「初期小説の世界――批判の原点」では、村上春樹の初期作品に通底する社会と個人との言語を介した関係性のテーマについて検討し、作家としてデビューした村上春樹が過去の体験を主題化し、言語化するにいたるプロセスを明らかにした。「風の歌を聴け」及び最初の二つの短編小説である「中国行きのスロウ・ボート」、「貧乏な叔母さんの話」を分析の対象とした。第二部「サルトルの影響――『回転木馬のデッド・ヒート』論」では、村上春樹によるサルトルの文学・哲学の受容の実態を明らかにした。サルトルの『嘔吐』や『存在と無』で展開された「実存主義」や「実存的精神分析」に関する論述の影響を、短篇集『回転木馬のデッド・ヒート』に収められた諸作品の分析を通じて解明した。第三部「否定の主題の不可能性」では、短篇集『パン屋再襲撃』に収録された二つの小説「パン屋再襲撃」と「ファミリー・アフェア」の分析を通じて、六十年代から八十年代に至る日本社会の急激な変化の中を主体的に生きることの難しさについて論じた。第四部「長編小説の世界――深層との格闘」では、長篇小説『ノルウェイの森』と『海辺のカフカ』の両作品に共通する、自我構造の二重性に起因する主体内部の相克の問題と、他者との関係性の内側で生じる善と悪との相克の問題の二つを、それぞれ全く異なる構成と文体でその主題にアプローチしていることを明らかにし、村上が目標とする「総合小説」の意義について考察した。

次に第一部第一章以下、各章の要旨をまとめる。

第一部第一章「『風の歌を聴け』論――語りの構造と固有名詞の不在」では、語り手の「僕」と「小指のない女の子」との擬似恋愛的な付き合いの挫折という形式をトレースすることで、村上春樹の全共闘体験の敗北と、日本社会の変化に伴う孤立感が「僕」の姿に形象化されたと論じた。さらに、作品の中に登場する固有名詞を持たない四人の人物を通じて、「リアルの世界」（固有名詞の世界）と一般概念の中にしか分類されていない「普遍的な世界」（抽象の世界）という近代的二項対立の世界のどちらにも属さないばらばらの「個」としての人間を描き出す独特の語りの手法について論じた。

第一部第二章「『中国行きのスロウ・ボート』論――他者を想起する」では、語り手の「僕」と出会った三人の在日中国人の様々な生きづらさを描出し、八〇年代の日本社会に生きるマイノリティの声を日本人の「僕」にとって理解不可能な声として描く作者村上の立場を明確に取り出した。日本人の善意が、行動として他者を傷つける暴力性にもなることを、日本人の「僕」の戸惑いよって描き出したと論じた。

第一部第三章「『貧乏な叔母さんの話』論――マイノリティとサリンジャー的表現手法」では、「僕」の背中に貼り付いている「貧乏な叔母さん」を見た友人たちの語りや、それに関心を持つマスコミの姿勢の変化を通じて、「貧乏な叔母さん」という言葉の象徴性が語り手の「僕」に対して徐々に開示されていくとともに、現代日本社会の排他的な構造が明らかにされていく作品の構造を論じた。「貧乏な叔母さん」という言葉が喚起するイメージは、現代日本社会の中で不都合な存在として抑圧排除されてきた「女性たち」の「元型」である。また、社会を分断する排他性や、社会的マイノリティを「元型」的イメージによって表現するこの小説の手法が、サリンジャーの『ライ麦畑でつかまえて』及び『フラニーとズーイ』の二作品から着想されたものであることを比較文学的に明らかにした。すなわち現実社会と抑圧された社会の二層構造を対位法的に描く手法、「貧乏な叔母さん」と「太ったおばさん」という、ともに「元型」的なイメージを喚起する言葉の用法の類似性を指摘することができた。特に『フラニーとズーイ』の中の「太ったおばさん」が現代アメリカ社会の日常性から排除されたすべての人間の象徴的な「元型」であるとの指摘によって、村上春樹のサリンジャー受容がマイノリティとその表現という方法論的な次元にわたるものであることを明らかにした。

第二部第一章「『嘔吐』の影響――男性の語りと〈実存感覚〉」では、『回転木馬のデッド・ヒート』所収の短篇のうち、男性の語り手がその体験を語る「嘔吐 1979」、「野球場」、「プールサイド」の三作を主たる考察の対象として、世界の「偶然性」、「不条理性」、「無根拠性」に直面する男性たちの主体の揺らぎ、分裂の様相に注目する。これらの作品の主題の背景には、サルトル『嘔吐』の語り手「ロカンタン」の不安と恐怖が存在することを指摘し、男性の欲望の対象への強い執着が、対象の統一的なイメージを破壊し、やがて意味を失って「即自的存在」としての絶対性を帯びて彼らの主観の内部に侵入してくる。人間の欲望が、世界の「偶然性」、「不条理性」、「無根拠性」に常に脅かされながらも持続する危うい姿が描かれた作品と結論した。村上春樹にとって、六十年代の流行思想であったサルトルの実存主義的

な人間像は、高度に情報化し出口を失った八十年代の日本社会を生きる青年たちの不安定な世界感覚を描く視座として選び取られたと論じた。

第二部第二章「『存在と無』の影響――女性の語りと〈自己欺瞞〉」では、『回転木馬のデッド・ヒート』所収の短篇のうち、女性の語り手がその体験を語る「雨やどり」、「レーダーホーゼン」の二作を主たる考察の対象として分析を行った。サルトルの『存在と無』の中で論じられる実存主義的精神分析学の原理と方法論を整理し、人間は分割不可能な主体として、根源的に選び取った目標に向けて行動するというサルトルの論述を、「雨やどり」の主人公である「彼女」の一見矛盾する二つの行動と照合し、根源的選択として選び取られた「彼女」の生の一貫した目標を明らかにした。

第三部第一章「『パン屋再襲撃』論――現実と虚構のはざま」では、六十年代末の社会的行動様式が情報社会を迎えた八十年代半ばの日本社会に再演されたとき、かつての行動様式が帯びていた社会正義や倫理的な価値が完全に無効となり、むしろ滑稽な茶番劇として浮き上がってしまうという現実を巧みな構成で描き切った作品として短篇「パン屋再襲撃」を論じた。虚構が現実を覆い、リアルな現実の手触りを失った八十年代半ばの日本社会への批判であり、同時に六十年代的な価値に執着し続ける生き方への自己反省という意味合いもそこには認められる。本作品は、村上春樹における全共闘運動とその敗北体験を考えるうえで、重要な作品であると論じた。

第三部第二章「『ファミリー・アフェア』論――埋没・抵抗・妥協」では、自分の価値基準を生活原理として堅固に貫こうとする語り手の「僕」と、「帰納法」的な原理で作動する資本主義社会システムの歯車のような「渡辺昇」(「妹」の婚約者）に象徴される人間との対立的な関係が描かれる。作品は、「妹」の真情を理解する兄が「妹」の結婚を受け入れる言葉で終わる。その兄の言葉は、社会システムの末端でシステムの保守点検のためにのみ生きてはならないという「妹」へのメッセージとして解釈することができる。兄妹の情感あふれる結末の背後に、現代日本社会への厳しい洞察が読み取れる作品であると論じた。

第四部第一章「『ノルウェイの森』論――〈カジュアルティーズ〉をめぐって」では、村上春樹が『ノルウェイの森』について「この話は基本的にカジュアルティーズ（うまい訳語を持たない。戦闘員の滅損とでも言うのか）についての話なのだ」とのちに述べていることに注目し、作中に登場する女性たちのそれぞれの恋愛を個別に論ずる従来の研究に対して、複数の女性たちが一つの課題をめぐって奮闘し、傷つき、時に自死の道をすら選択する物語として作品世界を読み直す試みである。そのような視角から本作を読むとき、作中に描かれたすべての女性が、社会という巨大な組織の欲望と個人の欲望との背反する関係に直面しており、その対立関係を超克しようとする困難な人生を迷わず選択していることが明らかになると論じた。

第四部第二章「『海辺のカフカ』論――「総合小説」としての可能性」では、まずストーリーライン上の欠落が見られる村上春樹の多くの作品に、「第三の新人」の手法、サルトルの実存主義的精神分析の理論の影響が確認できると論じ、村上春樹を戦後文学の中に位置

づけた。『海辺のカフカ』には、「田辺カフカ」の周辺に配置された「普通の人々」が捉えた世界を多中心的に描くことによって、世界をポリフォニックな交響曲として語る独特な手法が用いられていると論じ、村上春樹が目標として掲げる「総合小説」の位置にこの作品があると結論した。

初出一覧

序　章　書き下ろし

第一部

第一章　「村上春樹『風の歌を聴け』論――語りの構造と固有名詞の不在――」(『言語文化学研究』第十五号 大阪府立大学人間社会システム科学研究科 二〇二〇年三月)

第二章「村上春樹『中国行きのスロウ・ボート』論――他者を想起する――」(『阪神近代文学研究』第二十二号 阪神近代文学会 二〇二一年五月)

第三章「村上春樹『貧乏なおばさんの話』論――マイノリティとサリンジャー的表現手法――」(『言語文化学研究』第十七号 大阪府立大学人間社会システム科学研究科 二〇二二年三月)

第二部

第一章「村上春樹『回転木馬のデッド・ヒート』試論――サルトルの受容を中心に――」(『言語文化学研究』第十六号 大阪府立大学人間社会システム科学研究科二〇二一年三月)

第二章「村上春樹とサルトル『存在と無』――『回転木馬のデッド・ヒート』」試論(『季刊 iichiko』第一五五号 日本ベリエールアートセンター 二〇二に年七月)

第三部

第一章「『パン屋再襲撃』論――現実と虚構のはざま――」『季刊 iichiko』第一五四号 日本ベリエールアートセンター 二〇二二年四月)

第二章　書き下ろし

第四部

第一章「村上春樹『ノルウェイの森』論――〈カジュアルティーズ〉をめぐって――」(『言語文化学研究』第十八号 現代システム科学研究科 二〇二三年三月)

第二章　書き下ろし

終　章　書き下ろし

学位論文審査結果の要旨

学位論文審査委員会

学位論文提出者氏名　陳　柯岑
学位論文題目　　村上春樹作品研究――歴史と犠牲

言語文化学分野の論文審査基準に従って、審査結果を述べる。

1）研究テーマが絞り込まれている。

本論文は、1980 年代以降の日本の文学を牽引し、海外における評価も高い小説家の一人である村上春樹の、1979 年のデビュー作『風の歌を聴け』から 2002 年に刊行された『海辺のカフカ』にいたるおよそ 20 年間にわたる文学作品を分析対象とする。これまでの作品研究において見過ごされてきた 80 年代から 90 年代にかけての日本の社会システムの思想的課題と村上春樹の作品史との接点を解明し、総体としての村上文学の主題と方法を戦後日本文学史の中に新たに位置づける作業をおこなった。これらの作業は、日本の戦後文学の歴史性を確認するという重要なテーマの深化に大きく貢献するものであり、研究テーマの絞り込みは十分である。

2）研究の方法論が明確である。

本論文は、村上春樹が作品執筆に当たって参照したと推測される文学、思想、哲学等の文献を幅広く収集し精読することによって、比較文学の方法論を村上文学の研究に適用し、十分な成果を上げている。さらに作品言語を作品内部の論理に従って解釈する従来の作品研究の方法を踏まえながら、さらに言語と思想との関連を重視するテキスト読解の方法を用いて、村上の作品言語を戦後日本社会における歴史的言説として相対化する研究姿勢を堅持することによって、戦後日本文学における村上作品を位置づけることに成功している。このように本論文は、村上春樹研究の方法論的な拡大を試みるものであり、研究の方法論は明確である。

3）先行研究についての調査が十分に行われ、その知見が踏まえられている。

すでに膨大な作品研究の蓄積がある村上春樹研究の全体を十分に渉猟し、なおかつそれらをきわめて詳細かつ批判的に吟味しながら継承発展させている。加えて、村上作品との比較研究の対象とされる多くの著作に関しても、長年にわたる研究の蓄積があり、それら広範にわたる文献についても丁寧に収集、精読し、批判的検討が施されており、先行研究の知見の調査とその批判的考察は十分に行われている。

4）結論に至る議論の展開が十分な論拠に支えられ、かつ論理的である。

本論文各章の議論は多岐にわたるが、それら多様な考察によって明らかにされたのは、村上春樹文学と文学史上「第三の新人」と呼称される文学者たちの一群の作品との類似性とその意味するところの解明である。本論文は、戦争・敗戦体験を原基とする戦後日本文学の構造の反復的な現象として村上春樹文学を位置づけるものであり、この指摘によって、戦争あるいは紛争という冷戦後の顕著な世界的状況に置かれた若い読者の生きる地平に感応し、強く訴える文学として、村上文学が翻訳され、世界各国で受容される現象を説明可能なものとすることに成功した。この結論に至る議論は文学史の正確な知識と理解に支えられており、厳密かつ説得力を持って論理的に展開されている。

5）当該分野の学術研究の進展に貢献する、独創性を備えた内容である。

本論文によってもたらされた新しい知見として、村上作品が先行する文学作品を踏まえ、その特徴を活かしながら巧みに自作に取り込む過程が明らかになった事は、従来の研究をさらに進展させる重要な知見である。具体的には、村上の初期の短篇小説「貧乏な叔母さんの話」とサリンジャーの複数の作品との関係の指摘、同じく村上の短篇小説集『回転木馬のデッド・ヒート』とサルトルの哲学的な著作『嘔吐』『存在と無』、戯曲「出口なし」との主題と表現手法にわたる関連性の指摘は、村上文学と先行する文学、思想、哲学等との関係の解明を大きく進めるものであり、十分な独創性を踏まえている。

以上の評価を総合して、本学位審査委員会は、全員一致で本論文が人間社会システム科学研究科言語文化学分野の博士論文審査基準をすべて満たし、博士の学位に相応しいものであると結論した。